

2012 年上智大学言語学会第 27 回大会 発表要旨  
後置構文における島の効果と言語処理の諸原理\*  
鎌田浩二 (千葉大学)

本発表では、日本語の「後置構文」で観察される「島の効果」が言語処理の観点から説明できることを示し、言語能力 (competence) システムの出力の一部の説明をパーサが引き受けると主張する。

基本的に動詞で終わる日本語でも、例文 (1) のように動詞以外の要素が文末に現れることがある。この種の構文を後置構文と呼ぶことにする。

- (1) a. 昨日  $\phi$  車を買ったよ、太郎が。 [ $\phi$  は、文末に現れた要素 (太字部分) と関連する位置を示す。]  
b.  $\phi$  太郎が車を買ったよ、昨日。

後置構文の派生に関して、先行研究は移動分析派と非移動分析派の二つに大きく分類される。移動分析の根拠として、例えば複合名詞句制約に従うことが挙げられる ((2) 参照)。

- (2) \* [<sub>NP</sub> [<sub>CP</sub>  $\phi$  尊敬している] 先生] が増えていますよ、学生達が。

しかし、例文 (3) は複合名詞句制約の違反になっているにも拘わらず容認可能である。

- (3) [<sub>NP</sub> [<sub>CP</sub>  $\phi$  尊敬している] 学生達] が増えていますよ、あの先生を。

「島の制約」違反は統語現象が移動に関与していることを示すものと、一般的に仮定されている。つまり、もし移動によって派生されている様に見える統語現象が島の制約の違反になっても依然として容認可能ならば、その現象は移動によって派生されたものではないことを意味する。よって、例文 (3) は移動分析にとって問題となる。

本発表では、後置構文の文末に現れた要素は外的併合 (External Merge) によって生成されると主張する。そして以下の「認可条件」(4)、「解釈規則」(5)、言語処理の諸原理(6)・(7)を提案/採用することで、例文(2)、(3)で見られるような「島の効果」の有無は、(4)~(7)の相互作用の帰結として説明されることを示す。

- (4) 付加要素に対する認可条件 (X は統語範疇を表す) : XP に付加した句  $\alpha$  が認可されるのは、 $\alpha$  が  $\beta$  と関連付け (associate) られる場合のみである。ただし、 $\alpha$  が  $\beta$  と関連付けられるのは以下の条件を満たす時である。つまり (i)  $\alpha$  が  $\beta$  を c- (構成素) 統御し、且つ (ii) 格素性の点で  $\alpha$  が  $\beta$  と矛盾しない (non-distinct)。

- (5) 付加要素に関する解釈規則 :  $\alpha$  が認可された付加要素ならば、 $\alpha$  は次の (a) か (b) かのどちらかの解釈を受け—(a).  $\alpha$  は  $\beta$  と特性を共有する項として解釈される。ただし、以下の条件を満たす場合のみである : (i)  $\alpha$  が NP 又は CP であり、且つ (ii) 項の位置 (主語、目的語) に在る  $\beta$  と指示性 (referentiality) の点で  $\alpha$  が矛盾しない (non-distinct) 。(b).  $\alpha$  は  $\beta$  の潜在的修飾語として解釈される。ただし、 $\alpha$  が項として解釈されない場合に限る。

- (6) 一般化意味役割付与 : 統語論の諸原理が最大限に満たされるように、文処理は進行する。

Pritchett (1992)

- (7) 再解釈条件 : 以下のような  $\beta$  がある場合、パーサは統語的要素 (syntactic object) X を  $\alpha$  と関連付けることが出来ない。つまり、 $\alpha$  と  $\beta$  が類似し且つ  $\beta$  が  $\alpha$  より X に近い場合である。

#### 参考文献

Kamada, Kohji (2009) *Rightward Movement Phenomena in Human Language*. PhD Thesis, University of Edinburgh,

鎌田浩二 (2010) 「英語の右方転移構文」 (The Right Dislocation Construction in English) *Sophia Linguistica* 57: 131-153.

鎌田浩二 (2011) 「言語情報処理の観点からの後置構文の可能性」 『日本エドワード・サピア協会研究年報』 25: 11-21.

\*本発表は、上智大学言語学会第 23 回大会 (2008 年 7 月) において口頭発表した内容を大幅に改訂したものである。